

教育クラウドによる教育の未来像 ～校務の情報化が教育を変える～

[2012・FW] 20921006 阿部嵩史

1. 研究の背景と意義

21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として重要性を増す、知識基盤社会の時代と言われている。こうした21世紀を生きる子供達に求められる力を育むためには、何よりも、一人一人の子供達の多様性を尊重しつつ、それぞれの強みを生かし潜在能力を発揮させる個に応じた教育を行うとともに、異なる背景や多様な能力を持つ人同士がコミュニケーションを通じて協働して新たな価値を生み出す教育を行うことが重要になる。また、そのような教育を行うためには学校教育の情報化を行うことが不可欠である。

教育の情報化が、情報教育を推進する上での基本的な概念であり、その中に児童生徒の情報活用能力を育成する「情報教育」と、教科の目標を達成するためにICT活用する「教科におけるICTの活用」が、よく知られた目標であった。しかし、その教育の情報化に「校務の情報化」が含まれていることは、あまり注意を払われなかった。本論文は、教育の情報化の中でも、特に校務の情報化に焦点を当てたものであり、教育クラウドによる最適な校務情報化の進め方を提案することで新規性や独自性を見出した。

2. 研究目的・方法

本論文の目的は、第一に、校務の情報化が教育の質向上に有効であることを明確にすることである。第二に、校務の情報化を教育クラウドによって推進する方策を提案することである。

研究方法は、著書・論文・報告書などの先行研究をもとに、国内外における校務情報化・教育クラウド化の先行事例を調査するとともに、教育現場へのヒアリング調査を実施し、比較・考察を行った。またそれによって明らかになった日本の校務情報化・教育クラウド化のあるべき姿を整理し、結論を導いた。

3. 研究結果・考察

先行研究から、校務の情報化は、「教員の学校事務の軽減化・効率化」をすることで、「児童生徒に対する教育活動を質的に改善する」ことをも目的として取り入れられているということが分かった。つまり“校務の情報化”それ自体が本来の目的ではなく、情報化により、従来起きが

だった計算ミス・転記ミス等が減り、校務の処理が円滑になることで生まれる時間を、子どもたちと接したり教員自身の指導力の向上のために使えるようになることが本来の目的なのである。

教育現場へのヒアリング調査の結果からは、教員1人一台のPC配備は済んでいるものの、校務支援ソフトのような全教員が共通で使用できるソフトウェアは導入されておらず、各教員レベルでの省力化に留まっている。情報化に対する意識は教員によって差があり、情報機器のリテラシーも教員によって様々であるため、情報機器に精通している教員の負担が大きくなっている。また、社会構造の複雑化、開かれた学校への取り組みなどで校務は以前より多忙化していることが分かった。

教育クラウドは、教育・学校事務・その他学校経営に必要なサービスをクラウド・コンピューティング技術を用いることによって、費用対効果を高め、全国、或いは各県・各自治体規模の学校に等しくサービスを提供することができる。また、東日本大震災を機に、学校に求められる役割は見直されている。災害時における情報の保全はもちろんのこと災害発生後の継続的な教育サービスの提供及び避難所としての役割を果たすことも重要となってくる。教育クラウドはこれらのニーズに対しても大きな役割を果たしていく。さらに、このようなクラウドサービスは、専門知識を持つ企業および高いセキュリティ、対災害性を確保したデータセンターで運用されるため、自治体職員や学校教員等のスキルに関係なく、高いセキュリティに守られたサービスを楽しむことができる。

4. 結論

分析結果より、今後日本の教育現場が教育クラウドによる校務情報化を実現するための必要事項を提示した。

- ・統一されたシステムの導入
- ・リーダーシップの明確化
- ・教員のICTリテラシーの向上
- ・徹底された情報管理

教育クラウドの校務支援システムを導入することは出発点でしかなく、実際に校務情報化の効果を上げるためには、教職員によって積極的に運用され、しかも望ましい効果を上げるような運用面での創意工夫が必要である。